The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ニコラウス・ペヴスナーのデザイン研究と福祉社会構想
Author(s)	近藤, 存志
Citation	デザイン理論. 2025, 85, p. 62-63
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100275
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ニコラウス・ペヴスナーのデザイン研究と福祉社会構想

近藤　存志　東洋大学

はじめに

1941 年 7 月，イギリスではチャーチル率いる挙国一致戦時内閣によって戦後の社会保障制度をめぐる検討を行う特別委員会が設置され，「福祉国家」の実現に向けた取り組みがスタートした。1933 年にイギリスに亡命していたニコラウス・ペヴスナー（Nikolaus Pevsner, 1902–83）は，こうした動きを身近に観察することになった。本発表では，ペヴスナーが，第 2 次世界大戦下のイギリスで構想され，戦後になって推進されることになった「福祉国家・福祉社会」の実現に向けた取り組みを，デザイン研究の視点からどのように観察していたのかという点に注目した。

ペヴスナーの亡命と亡命学者支援協議会

ペヴスナーの亡命は，経済学者ウィリアム・ベヴァリッジ（William Beveridge, 1879–1963）の発案によって 1933 年 5 月にイギリスに設立された亡命学者支援協議会（Academic Assistance Council）の助けによって実現したものであった。

青年ペヴスナーの渡英と，その後の学究生活に，亡命学者支援協議会の存在がいかに重要な意味をもっていたかは，ペヴスナーが 1936 年に出版した最初の著作『モダン・ムーヴメントのパイオニアたち』（*Pioneers of the Modern Movement: From William Morris to Walter Gropius*）の献辞の中に亡命学者支援協議会の頭文字「The A.A.C.」が含まれていることからも明らかである。

ベヴァリッジと「ベヴァリッジ報告書」

亡命学者支援協議会に加え，人種・思想信条に基づいて大学の教壇を追われた学者たちの亡命を支援する組織の生みの親であったベヴァリッジの存在もまた，ペヴスナーにとって決して小さくはなかったはずである。

ベヴァリッジは 1901 年にオックスフォード大学を卒業すると，まもなく社会改良事業に強い関心を持つことになり，社会改良活動家のウェッブ夫妻（Sidney Webb, 1859–1947 / Beatrice Webb, 1858–1943）の「ナショナル・ミニマム」をはじめとする理論に大いに刺激されることになった。

1941 年初夏，ベヴァリッジは，戦時内閣が発足させた戦後の社会保障制度のあるべき方向性を検討する「社会保険および関連サービス各省委員会」（Interdepartmental Committee on Social Insurance and Allied Services）の責任者に就任した。彼の名は，今日，この委員会が 1942 年 12 月に公表した報告書「社会保険と関連サービス ── ウィリアム・ベヴァリッジ卿による報告」（*Social Insurance and Allied Services: Report by Sir William Beveridge*），通称「ベヴァリッジ報告書」（*Beveridge Report*）をとりまとめたことで広く知られている。

「ベヴァリッジ報告書」は，その基本理念において，賃金，労働時間，教育，公衆衛生，そして住宅などについて最低限の生活水準を国民に保証する「ナショナル・ミニマム」の原則に強く刺激されていた。

報告書は，戦後のイギリス社会を再建するうえで大きな障壁となる巨悪として，経済的にも道徳

的にも正当化し得ない肉体的・物質的な欠乏を意味する Want（困窮・貧困・欠乏），困窮・貧困・欠乏の原因・誘因ともなり得る Disease（疾病），民主主義社会を形成するに足る国民の間に存在してはならない Ignorance（無知），人口に対する富・収益の無計画な配分が生じさせる Squalor（不潔・陋隘），貧富の差にかかわらず働かないことによって富を破壊し人を腐敗させる Idleness（無為・怠惰）の 5 つを挙げ，このうち困窮・貧困・欠乏をめぐる問題に立ち向かう手段として，国民の最低限の生活を維持するために必要不可欠な所得を保障する社会保障の整備の重要性を唱えた。

ペヴスナーと福祉社会の理想

戦後復興のヴィジョンをイギリス国民に明示することになった「ベヴァリッジ報告書」を，ペヴスナーが意識していたことは疑いない。実際のところ，この頃すでにペヴスナーは現在進行形の社会の実態と建築・美術・デザインの歴史研究との結びつき，さらには現実社会の遂行に具体的な役割を果たし得る建築・美術・デザイン史研究のあり様について強い関心を示していたからである。

ペヴスナーは，1940 年に「もはや歴史家は現代社会の必要から断絶したままではいられない」[1] と記し，1942 年に「建築は材料や目的による生産物ではなく，また社会的条件によるものではなく，まさに変化する時代の，変化する精神の生みだすものである」[2] と主張したことは，こうした関心の表れである。

亡命後，ペヴスナーは社会改革に資する提言・示唆を，記事や小論として雑誌に寄稿しはじめ，終戦直後には福祉社会の実現に向けた取り組みに具体的にかかわる団体のための記事や刊行物を執筆している。具体的には，1936 年の 4 月から 11 月にかけて計 7 回にわたり『アーキテクチュアル・リヴュー』（*The Architectural Review*）誌に寄稿した連載「産業界におけるデザイナー」（'The Designer in Industry'），1943 年 3 月に『アーキテクチュアル・リヴュー』誌に発表した文章「初期の労働者階級住宅」（'Early Working Class Housing'）[3]，1946 年 3 月に労働者教育協会（Workers' Educational Association）の機関紙『ザ・ハイウェイ』（*The Highway*）に寄稿した小論「産業デザインについて思うこと」（'Thoughts on Industrial Design'），1946 年に視覚芸術教育協議会（Council of Visual Education）発行の小冊子シリーズの一冊として執筆された『日用品から得る視覚的悦び』（*Visual Pleasures from Everyday Things*）などである。これらはいずれも学術性よりも，社会啓発的な傾向が強く表れた著述物である。

こうした執筆活動は，「ベヴァリッジ報告書」の公表に象徴されるイギリスにおける福祉社会の実現に向けた取り組みを，ペヴスナーが身近な変革として意識し，自らのデザイン研究との接点を模索していたことを今に伝えている。そしてペヴスナーのそうした姿勢は，既出の『日用品から得る視覚的悦び』の中で彼が，第 2 次世界大戦直後の社会を念頭に，「視覚的な美しさがこれほどまでに希薄になった時代」（'an age in which visual beauty has grown so rare'）だからこそ，「より豊かに人生を生きるために」（'for the sake of a fuller life'）視覚芸術教育が重要である[4]，と主張したことに端的に表れていると言って良いであろう。

註

1） Nikolaus Pevsner, *Academies of Art: Past and Present*, Cambridge: Cambridge University Press, 1940, p. viii.
2） Nikolaus Pevsner, *An Outline of European Architecture*, London: J. Murray, 1942, p. xxi.
3） この文章は，19 世紀イギリスのさまざまな活字媒体に掲載された労働者階級向けの住宅に関する記事から引用を集めたもので，ペヴスナー自身によるコメントが付けられている。
4） Nikolaus Pevsner, *Visual Pleasures from Everyday Things: An Attempt to Establish Criteria by which the Aesthetic Qualities of Design can be Judged*, London: B. T. Batsford, 1946, p. 5.